

## あおぞら農協畜産クラスター協議会

### I はじめに

あおぞら農協管内では、肉用牛繁殖農家の高齢化や担い手の不足が懸念されている。このような生産基盤の脆弱化に対応するためには、短期的には、高齢農家の支援が不可欠である。例えば、ヘルパーやコントラクターによる作業の代替機能の拡充があげられる。中長期的には、新たな担い手の確保が求められている。

以下では、新たな担い手として新規就農した事例を取り上げる。

### II 立山雄大氏の新規就農事例

平成 27 年度畜産クラスター事業で、立山雄大氏が新規就農した。雄大氏は、大学卒業後に、有機園芸の会社に就職していたが、平成 24 年に退職し、父親の肉用牛繁殖経営において新規就農に向けた研修を実施していた。

畜産クラスター事業を活用して牛舎を建設、繁殖雌牛も導入している。分娩時期（子牛出荷時期）の偏りを避けるため、子牛と妊娠牛を導入している（写真 1、2）。導入は、曾於家畜市場からで、子牛は 75 万円/頭、妊娠牛は 90 万円/頭も要した。妊娠牛での導入は、父親からのアドバイスもあった。施設や家畜の投資状況は、下記の通りである。

- ①畜舎 繁殖牛舎 1 棟（435 m<sup>2</sup>）  
子牛育成舎 1 棟（364.8 m<sup>2</sup>）
- ②家畜 繁殖雌牛 50 頭（子牛 30 頭，妊娠牛 20 頭）



【写真 1 立山雄大氏の牛舎】



【写真 2 妊娠牛を飼育している牛舎】

繁殖雌牛の飼養頭数は、現在、50頭であるが、目標は60頭である。増頭に当たっては、自家産の雌子牛を後継牛とする方法を考えている。後継牛とするかどうかの判断は、血統（華春福・安福久）、大きさ、形で行うとのことであった。

なお、敷地面積は1haあるが、3年前に、450万円で購入していた。畜舎が建築できる敷地が確保されていたことは大きい。

### Ⅲ 家族の支援

現在、父親所有の機械を借りて飼料作物を生産している。そして、不足分を購入するという形態をとっている。飼料畑面積は500aで、夏作としてローズグラス、冬作としてイタリアンライグラスを栽培している。前者は、10a当たり300kgのロールを5個、後者は、一番草で7個、二番草で4～5個収穫調製している。現在、母牛は粗飼料を100%自給しており、子牛は、乾草（オーツヘイ）を購入している。

雄大氏によると、経営をする上で分からないところが多く、細かい作業で時間がとられるとのことであった。しかし、父親の支援もあり、平均種付回数は1.4回と優れた成績を享受している。発情発見が的確に行われていることになる。

さらに、牛舎の立地条件が良く、自宅と牛舎までの距離が1kmであり、通常、朝5:30には牛舎に来ている。そして、夕食で自宅に戻った後も、夜10時に来ている。そして、出荷の時は、朝5時には牛舎に来ている。家畜市場までは10kmの距離がある。出荷の時は、父親、雄大氏、弟の3人が一緒になって輸送作業を行っている。

なお、雄大氏の家畜飼養技術が確立するまでは、飼料作は、父親と弟が、本人に代わって作業を行うことになっている。

平成28(2016)年10月から、和子牛の出荷が始まった。12月26日時点で、6頭を出荷している。販売単価は70万円/頭であった。ただし、市場平均の80万円と比較すると、10万円安価であった。これは、和子牛が小さかったことによる。

### Ⅳ 関係機関の支援

鹿児島県経済連が実施する「繁殖経営安定事業」(2期10年)に、雄大氏は参加している。これによって、子牛で650円/日、育成牛で200円/日が仮払金として支払われることになる。

また、毎月、経営状況・技術データの検討会が、経済連・JAによって行われていて、経営のチェックがなされている。特に、新規就農の場合には、このことは重要な支援といえる。

さらに、家畜共済の有明出張所が近隣にあり、電話をすればすぐに対応しても

らえることも大きい。畜産クラスターで、多額の投資であったが、JA が所有して、リースで雄大氏に貸与するという形態をとっている。

## V ファームサービス

JA あおぞら管内の繁殖農家は、280～290 戸であり、3,000 頭の繁殖雌牛を飼養している。1 戸当たり 11 頭の飼養頭数であるが、平均年齢が 70 歳を超えている。

父親は、ヘルパーやオペレーターの役割を担って、高齢化した繁殖農家のサポートを行っている。近隣の 50 戸の繁殖農家のうち 20 戸のヘルパーの役割を果たしている。具体的には、和子牛の市場までの運搬である。

なお、曾於家畜市場で取引される和子牛は、6 割が県内に留まり、4 割が県外へ販売されている。県内は、主として薩摩半島であり、和子牛の情報のフィードバックがなされている。

## VI おわりに

JA あおぞらは、管内に 3,000 頭の繁殖雌牛を擁する大規模和牛産地である。しかし、前述のように、繁殖農家の高齢化が進み、平均年齢が 70 歳を超えている。立山雄大氏の父親のように、ヘルパーやコントラクターの役割は、高齢農家をサポートする上で重要である。それだけでは、産地の維持は難しい。若い後継者の新規就農が、長期的には必要となる。

今後は、雄大氏の経営展開が求められる。鹿児島経済連や JA による、PDCA サイクルの支援システムは極めて重要といえる。まさしく、インキュベーター機能といえるのである。

(横溝 功)